

## Middlemarch

### Ⅱ. Lydgate の人生における理想の挫折について(2)

嶋 田 貴美子

(前号からの続き 3)

Rosamond が Lydgate の優れた血縁関係に憧れたのと同様に、彼女の父 Vincy 氏も娘がそのように baronet<sup>(1)</sup> の血筋にある人と結婚することに対して一たんは誇らしく思い、Rosamond と Lydgate との婚約を快く認めたのではあったが、Featherstone 老人が死に際して自分の姪と甥に当たる Rosamond と Fred に彼の持つ莫大な資産のほとんど何物をも残さなかった意外な結末に憤慨し、姻戚関係なる者たちには全く信用が置けなくなった Vincy 氏は Featherstone 老人の死の直後たちまち態度を一変させた。そして社会的にも status の低い貧しい一介の医者である現在の Lydgate の赤裸々な姿に失望以外の何物も見出すことができず、彼と娘との婚約に強く反対するようになったのであった。Vincy 家のはででぜいたくな暮らしと、その暮らしに慣れてしまっている Rosamond の、ぜいたくを当然のことと考える習性を知っている人たちはみんな、みりの少ない医者という職業に携さわっている Lydgate が現在から将来にわたってまで、Rosamond との生活をまかなうほどの経済力を持ちえないことを心配した。しかし Rosamond からすれば Lydgate の背後に常に見えている Lydgate のおじの baronet の姿は、何にもまさる富の神であり、その baronet の息子や娘たちとの交際は、Rosamond が夢に描いていた理想郷であって、現在の Lydgate が貧しいということなど全く問題ではなかったのである。

Lydgate の方も貧しいとはいえそれまでの気楽な一人身の境涯の中では金銭に窮したことはなく、Rosamond との今後の結婚生活の上においても窮乏の不安などさらさら感じることはできなかった。周囲の反対や心配の声をよそに、婚約者 Rosamond について Lydgate は次のように考える。

彼はあたかも、教養ある女性によってしかもたらされないであろう申し分のない夫婦の愛情の息吹をもはや感じた。高遠な思索や重要な仕事を崇拜し、決してそれを妨げない人、こっそりと魔術を使って家庭にも家計にも秩序を作り出すが、それでも指はいつでもルートをかなでる用意ができていて、生活をロマンスにかえる人、女性としての真の限度を知り、それを一歩もでないような教育を受けた、従順でその限度を越えたところからくる命令をも実行する用意ができていて、そういう人が彼のいう教養ある女性であった。もっともっと独身生活を続けようと思っていたのは間違いであったということが今やますます明確になってきた。結婚は彼の研究生活の妨げになるのではなくて、助長になることだろう。<sup>(2)</sup>

これは Casaubon 氏が Dorothea と結婚を決意した時に Dorothea の中に認めた自己犠牲的愛情とはほぼ同じ類のものであった。つまり Lydgate は Rosamond を勝手に偶像化し、Rosamond の自分への愛が人間としての本質の部分で結びついた絶対的なものであることを少しも疑ってはいない。そして Lydgate の彼女への愛は、Rosamond の従順さ、すなおさと、彼女が教養ある女性として夢と希望に燃えた青年医師を陰でしっかり支えてくれるに違いないという自分勝手な彼女への期待とで成り立っていたのである。Madam Laure との恋<sup>(3)</sup>において、従順で愛情あふれたやさしい妻という仮面の下から突如として現われ出た恐るべき Laure の実の姿に驚愕した経験もま新しい Lydgate が、Vincy 家の party に何度も招かれながらその遊興を好む両親の、特に極めてはでな母親の下で育てられた Rosamond の中にあるその影響が、自分の理想的人生の根幹である、世俗的欲望とは無縁の純粋な科学者としての学究的な人生と相克する関係にあることをすっかり見落としていたのは、何ともやりきれない気がする。これは Lydgate の、人間の本源は人体の組織にあるとする実証主義的な考え方に起因する、恋にかぎらず人間関係を作り出す上では最も危険きわまりない誤謬であろう。Lydgateの医学的生命ともいうべき、医療の改革と科学的発見は Rosamond には何の意味もないものであり、Rosamond にとっての Lydgate は、Middlemarch 以外の出身者であって baronet のおじがいるという二つの条件だけで十分であったのだ。

Dorothea と Casaubon との結婚の中における過ちを考えた際にすでに見てきたように、心に理想を抱きその理想の達成を結婚生活の中で実現させようと思うとき、理想が大きいものであればあるほど結婚相手に対する期待が強まり、相手を美化し幻想を抱き安い。その例にもれず Lydgate も Rosamond を美化し、彼女を偶像化することによって自分の理想の達成には彼女が最良の伴侶であると考えた。そして Rosamond もまた、Lydgate がもはや心理的にはほとんど絶縁状態にあるとはいえ、その関係は自分の美貌で何とでも改善できると信じる、彼のおじの baronet を介して我身にもたらされるであろう、人がうらやむようなはなやかな社交界を夢みて、Lydgate を自分の周囲にはまたと現われないであろう最適の伴侶と考えたのである。

## 4

本学紀要20号において筆者は、Dorothea と Casaubon 氏との結婚の挫折の背後に見られる Shakespear 四大悲劇<sup>(5)</sup>の一つ、*Othello*<sup>(6)</sup>の中における Venice の貴族の娘 Desdemona と軍人 Othello との結婚の悲劇の陰について述べたのであるが、彼らの悲劇的結婚に相通じている根本的原因がこの相手の偶像化にあることを考えると、George Eliot は Rosamond と Lydgate の結婚に対してもこの *Othello* のテーマを波及させていたように思われるのである。状況設定からしても、Othello と Desdemona、Lydgate と Rosamond の結婚には類似性が多い。まずは一応は貴族の血筋ではあるものの実質的にはもはやそれとはほとんど縁のない軍人としての生活を送っている、いわば根なし草の流れ者である Othello と、これもまた貴族の血筋はあるものの両親なきあと根なし草となったいわゆる流れ者の医者 Lydgate の立場の上での類似性である。それからまた Venice の貴族の家で何不自由なく育てられそのマンネリ化し

た生活に倦んでいた Desdemona に与えた流れ者 Othello の新鮮な魅力と、Middlemarch の bourgeois の娘として遊興と社交の中でマナーリズムを感じている Rosamond に与えた stranger, Lydgate の魅力の類似性もあるのである。George Eliot はよそから来た者 (stranger) が乙女心に与える印象について次のように述べている。

見知らぬ地からの者は、たとえ難破していかだにしがみついているように、きちんとした付き人を連れ旅行かばんにきっちり衣装をつめていようが、乙女心には常にその時々状況がかもし出す魅力を持っているものである。そしてその魅力に対抗しようとしても、土地の者は、たとえどんな美点をもつてしてもかなわないのである。

この乙女心は、土地の貴族 Roderigo の切なる愛をにべもなく拒絶して stranger である Othello を夫に選んだ Desdemona の心であり、そして Rosamond のぜいたくな生活のスタイルを十分満足させられる町の商人の息子で Rosamond を心から愛している Ned Primdale を歯牙にもかけないで stranger である Lydgate を夫に選んだ Rosamond の心でもあったのだ。

そして Othello も Lydgate も高貴な生まれであることに依拠しながらもどちらかといえば社会的な status の低いおのおのの職業に、絶対的な自信と誇りを持っているいわば横柄、かつ傲慢な性格の持ち主である。そういう人々は、とかく独善的考えに陥りやすい。Othello はイコール軍人でありそれまでの武勇にかけては彼の右に出る人はおらず、一方 Lydgate はイコール科学者であって、世界的に傑出した医者 of 人生をめざしている新進気鋭の若者である。そして Desdemona は Othello が「軍人である」故に、それから七歳の頃より戦場に出て数々の武勇を持つその勇ましい過去故に、Othello を愛したのであって、一人の人間として彼を愛したのではなかったのであった。それと同様に、Rosamond もまた Lydgate の、自分に持たらず baronet との関係故に Lydgate を愛したのであって、Lydgate 本人の人間性を愛したのではなかった。そのような彼女たちの無防備な足場のしっかりしていない愛情に対して、Othello も Lydgate も、軍人、科学者という人の心を敏感に感じとるには極めて不得手な職業からくる性格ゆえに、妻となる女性の実像を見失ない、彼女たちの愛に妄想や幻想を抱きやすかったのである。すなわち彼らの愛にはもろく崩れていく要素が多分に含まれていたのであった。Othello が Desdemona を惨殺しもはや Desdemona の愛を取り返すことができなくなったとき自分のことを「愛しすぎて愛しかたを知らなかった男」と言<sup>(8)</sup>ってやっと自分の性格的欠陥に気付いたのと同様に、Lydgate は Lydgate で Rosamond と結婚しもはや後に引けなくなってやっと、彼女に思うようにはでな生活を続けさせることのできない自分に気付いた、というよりも、Rosamond の生活様式と自分の生活様式のあまりの違いに気付き、二人の結婚は失敗だったことを悟るに及んで愕然とするのである。このように彼らの悲劇的結婚をつぶさに見てみると結婚こそ最も人間的な営みであり、互いの人格に対する強い愛が必須条件であるのであって、誤った結婚は、そのことの認識を欠き年齢的な若さや社会的な経験が不足している故に、あるいは個人の側の、もしくは社会の側の偏見のために、お互いの人格を見通す洞察力をなくしていたり、それが全く曇らされていたりすることが原因となっている場合が多いことがわかるであろう。以上のような意味において、Othello のテーマは、Casaubon と Dorothea

の story に与えたほどのものではないとしても、Lydgate と Rosamond の story の上にも多かれ少なかれ影を落しているのである。

Rosamond が Lydgate の人格を正しく見、そして夫として彼の真実の愛を見出す目を見失っている理由は、この Middlemarch の町の人々のことのほか血筋を重んじる因襲<sup>(10)</sup>と Rosamond 自身の持つ血筋への偏見とにあったのである。Rosamond が Middlemarch では最も美しい女性であるということは衆人の認めるところでありながら、だからといって Tipton の maner を有する baronet の姪である Dorothea のように一般の人々から「神々を見るような目で仰ぎ見られる」ような階級に上れる訳ではなく、常にその願望を心に抱きつつも、Middlemarch にいる限り工場主の娘として社交の場においてすら Dorothea とは同席できない身分に甘んじていざるをえないことに Rosamond はうんざりしていたのである。それと相まって結婚の相手もまた Rosamond が「少年の頃から知っている」商人の息子たちに限定されるその不条理をどうしても打破して身近に新風を巻き起こしたいと Rosamond は考えたのであった。そしてその糸口として高貴な血筋の後盾を持つ Lydgate の愛にすがったのである。

一方 Lydgate が Rosamond を見誤った原因については、端的に言えば Casaubon 氏が Dorothea に抱いたものと同じ幻想、つまり自分の人生の理想の達成に対して全面的に助力する自己犠牲的愛情が Rosamond の中に当然あるかのごとく錯覚してしまったことにある。そして Lydgate はうぬぼれの強い性格から自分が他の医者たちとは異なった良い血筋の持ち主であることを内心誇ってはいたものの、自らその根を断ち切っていたことからわかるように、その家柄に就着する気持は全く持っておらず、Middlemarch の人々のことごとくが人の身分を取ざたする<sup>(11)</sup> そういった高い階級意識を Lydgate 自身は持ってはない。そして数年 Paris に住み、ごく最近 Middlemarch に越してきたばかりの stranger であったために、イギリスの田舎町の持っている体質とか因襲に無知であったことに加えて、Lydgate は Middlemarch 独特の階級意識が人々を拘束する力については全く無関心で、Rosamond を自分に強く結びつけているものが取りもなおさずその階級意識であったことにも気付いてはいない。また Middlemarch は1830年前後のイギリスの田舎町で、当学紀要前号の(1)章で述べたように、旧式な中にもある程度新しい物の考え方が流入して「社交の境界を常に<sup>(12)</sup> 変え、相互依存の新しい意識を生み出す変動があり」自己の身分が固定したものではなくなりつつあったのであって、Rosamond が美貌を盾に上流階級の仲間入りをしたいと願ったとしても、当時の意識からしたらそれほど奇異なことではなかったかもしれない。それに Rosamond は、身分は中流であるものの、いわゆる bourgeois の娘であり、日常の汚れ仕事は召使いに任せ日々着飾って趣味と娯楽に明け暮れる生活を送ることはできたのであって、彼女がその上さらに上流階級の華やかな生活に憧れたとしても、*Adam Bede* の中の絶世の美人で農民の娘 Hetty Sorrel が、地主の息子 Arthur との結婚の向こう側にある、汚れた野良着や早起きや細々とした畑仕事や酪農場での過酷な仕事で満ちている現在の自分の生活とはまるで異なった天国のような上流階級の生活に憧れたのと比較すると、お互い願望が虚栄心で成りたっていることは共通していても、作品へのインパクトや彼女たちの人生にそれがもたらす運命には大きな違いがあるのである。さ

らに *Adam Bede* の舞台の Hayslope 村は、*Middlemarch* の舞台のその町よりも30年ほども逆上った18世紀末の閉塞的な農村であり、Hetty のそのような願望はとうてい許されるべきものではなかったのに対して、Rosamond の願望は夫の Lydgate すら気付かない、はた目には決して見えない許されてしかるべき願望であったのだ。それ故 Hetty は絞首台は免れたものの流刑に処されたのに対して Rosamond は結局は上流階級には加わることはできなかったものの Lydgate 亡きあと裕福な医者と再婚し人のうらやむ栄華を手にしたという点で自己の願望を貫く人生を生きたのである。そのように George Eliot が描くぜいたくな趣向のある美しい女性は、その美貌を売り物に身分の上昇を請い願うところから不幸が始まるようである。しかし George Eliot は女性の上流階級に志向する気持を否定はしていない。成長した後に名家の子女であることがわかった *Felix Holt* 中の Esther や、*Silas Marner* の Eppie は、人がうらやむ上流階級のその身分を受け入れることを拒否するが、George Eliot は彼女たちの決断を賛美してはいるものの、いくらかの憐憫の情をもって彼女たちをながめていることも確かである。George Eliot の考え方には、

私たちが求める家具や晩餐会や紋章を持つ貴族の家柄への誇りが私たちを確立した秩序にしっかり結びつけている限り、極端な考え方ですら無難に扱うことができるのだ。

と述べて armorial bearings つまりそれぞれ独得な紋章を持つ貴族階級の人々と established order つまり伝統とを重んじる傾向が強く働いているのである。そういう意図からすれば Casaubon 氏が妻の Dorothea は Will と再婚した場合自分の所有するその manor を受け継ぐ権利はないという遺書を書き、身内係累がもはやいないことからその manor から Casaubon の名を事実上抹殺しようとしたことや、Dorothea が実際に Will と結婚して高貴な血筋と地主であるその身分を捨てたこと、それからまた Lydgate が医者という身分の低い職業につくことによる家名への不名誉のためにおじたちの心象を害して彼らと半絶縁的状态を余儀なくしていることは、George Eliot にとって特別な感慨があったに違いない。しかし、30年の時代の流れは、Hayslope 村では Hetty と Arther の結婚がとんでもない許されるまじきことであったのに対して Middlemarch においては Dorothea と Will の結婚や、自分の理想のためにあっさり家名を捨てた Lydgate にみられるように、George Eliot が愛惜する established order が次第に崩れていく傾向にあり、作者の惜別の念はそこかしこに感じられるのである。しかし Middlemarch の establish order の崩れはほんの微々たるものであって、その町は Dorothea と Will の結婚は許したものの、まだまだ Rosamond が自分が生まれた家柄に不満を持ちながらも上流階級に焦られる域を出ない、整然とした堅固な階級制度のひかれた古い体制をもった町であったのである。

## 5

当学紀要前号の第3章でみてきたように、Rosamond と Lydgate は、家具調度や住まい、つまり生活様式についての考え方において当初は共通点が多かった。それで彼らは大きな邸宅を借り、Lydgate はその家に第一級の家具調度をそろえ、Rosamond には驚くほどの高価な宝石

類を送ったのであった。しかし目下のところそれだけの金額を支払うべき持ち合わせの金はなく、それらはすべて付けでまかなわれた。そうして彼らの結婚生活はスタートしたのであったが、Rosamond は当然のこととして実家 Vincy 家の社交や、そのほでな生活をそのまま Lydgate との生活に持ち込んだ。医業分業を提唱し、薬代からの利益を得ないことをモットーにしている Lydgate が、この Rosamond とのはでな暮らしを維持していくためには、「人々にあびるほど薬を飲ませて」利益を上げている町の他の医者たちの何倍もの患者をとらなければならない。しかし Lydgate についての町の人々の評判は日を追って悪化していく傾向にあった。

Lydgate が Middlemarch において思うように評判の上がらなかった理由には大きく分けて三つのものがあつたが、その一つは、Lydgate のこうした医業分業の姿勢、つまりできるだけ薬を使うのを控えて食事法やその他の方法で治療を行なう方針を Middlemarchers がそれほど歓迎しなかったことである。

Lydgate が薬を調剤しないということはたちまち噂になった。これは内科医と外科医兼薬剤師の双方を怒らせることになった。内科医は、自分たちだけの優れた特性が損なわれたと思い、また外科医兼薬剤師は Lydgate が自分たちの側に入りこんできたと思った。ほんの少し前だったら、ロンドン大学の学位もとっていない者が薬代ではないものに支払いを請求することに徒党を組んで法律にそむくと言い出したかもしれない。しかし経験不足の Lydgate は自分の新しい医療方法が医者たちよりも町の一般の人々の気分をより損ねるものであることを予見することはできなかった。Top 市場で羽振りの良い食料品店を営んでいる Mawmsey 氏が・・・その問題について・・・Lydgate にきいた時・・・

(Lydgate は) もし開業医の仕事に対して支払われる収入の方法がただ水薬や丸薬や調合剤をふんだんに与えてその莫大な薬代によるものであつたとすれば、開業医の質は低下するに違いないということを目指した。「そんな手段をとっている限り一生懸命働くまじめな医者たちでも山師のような有害なものになりかねません」と浅はかにも Lydgate は言ったのだ。「自分自身のパンを得るために、彼らは我が国王の臣民に薬をあびるほど与えなくてはならないのです」・・・

しかし実際のところ彼の (Mawmsey 氏の) 考えはすっかりかき乱されていた。彼は長年の間きちんと簡条書にされた薬の請求書の代金を支払ってきて、その代金が半クラウンなら半クラウン分の、18ペンスなら18ペンスのそれ相応の額のものが確かに渡されたということを実感していた。彼は夫であり父親である者の責任の一つを果たしているのだという満足感と、それからいつもより多くの薬代の請求があると威厳が一つ加わってそれは人に話す価値が十分あると思う満足感とを持って、それまで薬代を支払ってきたのである。そればかりか「自分自身も家族も」多大な薬の恩恵を受けているのに加えて、彼はそれらの薬の急速な効き目についての鋭い判断をするという喜びを楽しんだのであつた・・・

Mawmsey 氏の言うことはこの新米の医者<sup>99</sup>の浅はかな話よりも深い道理があつたのである。・・・

Mawmsey 氏の妻は、「あのお医者様は、病人のところに来て座ってまた帰って行くだけで人々がお金を払ってくれると思ってるのでしょうか」と言った。

また Mawmsey 氏のかかりつけの医者である Gambit 医師は、Lydgate が医業分業を主張していることについて、

Lydgate という男は自分自身の誠実を吹聴し他の医師の信用を害しようとする偽善者であるから、誰かがおいおい時間をかけて彼のばけの皮をはがすことは価値のあることだ。

と思う。またある晩餐会ではその同じ話題の中で Toller 医師と Huckbutt 氏は、

「それでは薬屋の Dibbitts は今持っているかび臭い薬を一掃できるだろう。・・・」

「・・・医者たる者は、自分の患者が飲む薬の品質には責任を持つべきだ。それが今まで行なわれてきた医療費請求制度の論理的根拠ですよ。実際のところ改良すべき点は何もないのにこれみよがしに改革を唱えることほどいやなものはありませんね」

という。すると Wrench 医師は、

「・・・人間が犯すもっとも紳士的でない卑劣な行為は昔ながらの由緒あるやり方を侮辱するような改革案をもって同業者の一員になろうとすることだ。」

というふうに癩癩をおこしながらとげとげしく言っている。

Middlemarch の人がすべてこのように Lydgate のその改革案を非難し、Lydgate 本人を嫌悪していた訳ではなく、高額の治療費が払えない貧しい人々とか、Lydgate の医学的手腕を認めて積極的に Lydgate にかかる患者もいるにはいたが、しかし、人々が Lydgate を見る目はおおむねこのようなものであったのである。町の良家はもはやかかりつけの医者が決まっていた、Lydgate は Peacock という医師が亡くなってその後任として Middlemarch に来たのではあったが、それまで Peacock 医師の患者であった者たちがこぞって Lydgate の患者になった訳ではない。そして当学紀要前号の1章の中で述べた Dorothea と Casaubon 氏との婚約披露パーティーの席上で Standish 氏が言っている言葉からもわかるように、こと医療に関しては人々は新しい治療法よりも「多少なりとも実験ずみの治療法の方がいい」と思っているのである。そして Brooke 氏の「あなたが飲む薬はどれもみな一つの実験なのです」という言葉が示すような進歩的な考えは他の Middlemarchers の間にはまだあまり育っていなかったようである。

Lydgate が医者として不評である二つ目の理由は、Lydgate が病気の原因究明のために患者の死後ただちに遺体を解剖することに執着したことであった。Slaughter Lane の酒場 Tankard のおかみ Mrs.Drop は次のように言っている。

Doctor Lydgate は患者に毒をのませるようなことはないにしてもあの病院で死なせるつもりだ。それというのも・・・死体を解剖するためなのだ。・・・いくらでも取りえのある医者だったら、死ぬ前に病気の真相をわかるべきだ。死んでしまってからその患者の体の中を見てみたいなどと思ってはならないのだ。

Middlemarch の人々が gossip を好み盛んに行なわれた社交の場での話題がもっぱら人々の gossip であり、また人の意見に極めて影響を受けやすい町の人々の性格からすると、こうした Tankard のような酒場のおかみの意見を軽んじることはできない。Tankard はまた、大きな Benefit Club (共済組合) の寄り合いの場でもあったのだ。

このように、医師がいつも通りのやり方でいつも通りの薬を出す医療に対して町のほとんどの者が何の不都合も感じないばかりか、そのような従来の医療方法に安心感と誇らしさを抱い

ている殊に保守的で閉鎖的な Middlemarch の医療事情の中で改革を叫び実行することの困難について Lydgate は全く意に介してはいない。それどころか逆にそうであるからこそ改革の闘志をかきたてて、いわゆる Middlemarch の医療界の招かれざる変革者たらんとしたところに、Lydgate の不評の原因の一つがあったといえるであろう。それからさらにもう一つ、Lydgate への町の人々の反目の原因の大きなものは Lydgate と Bulstrode 氏とのさらなる接近である。

Bulstrode 氏への Middlemarch の人々の憎悪的な感情については当学紀要前号の *Middlemarch* の2章の引用文にあるとおりであるが、Bulstrode の Lydgate への友好的感情は、時の経過と共にますます強くなっていったのであった。そして「あなたが高遠な目標を勢力的に達成しようとなさっている限り援助は惜しみません」という言葉どおりに、Bulstrode 氏は新病院の医療面を Lydgate に一任したのである。ところが「Bulstrode さんを妨害するためならこの町の半分は労をいとわないでしょう」と Lydgate 本人が言っているように、その新設病院に付属する伝染性熱病棟の建設に対して Bulstrode のやり方に大きな不満を持つ町の医師たちの協力は全く得られないことはもとより、医師たちは病棟建設のための町の人々からの寄付を妨害しようとしたのである。病院付有給専任牧師の投票時にすでに Bulstrode との同じ穴のむじなと目され「Lydgate は Bulstrode の隠し子である」という gossip まで流された Lydgate の立場は、Bulstrode 氏が大半の資金面を受け持つその伝染性の熱病棟が、Bulstrode によって科学的な実証に基づく Lydgate の研究に寄与することを目的に建てられたとすれば、建前はそこで働くことが無給で町の慈善事業に協力するものであったとはいえ、Lydgate と町の人々との間の悪感情が好転するはずはない。Lydgate が「従来の治療法に比べてよりよい治療法を始めることができる信じ」、「医療の現場に恒久的な利益をもたらすことになるであろう観察や研究を続けることができる信じている」その新病棟の建設を町の他の医師たちが妨害しようとしたその行為の根拠に、Lydgate が「若くて新参者でそこに古くからいる人たちよりもちょっとばかり物を知っている」という嫉妬もあったことは否定できないが、それが Bulstrode への反目と重なって医師たちばかりか一般の人々を巻きこんで Lydgate に対する攻撃的力を倍加させたのである。

Middlemarch に住む者は誰もが自分の人生に誇りと自信を持って暮らしているが、先にも述べたように Dr Minchin と Dr Sprague を頭にした他の医師たちは特にその傾向が強くそれがいかに旧式な考えにのっとりた旧式でかつ原始的な治療法であろうとも、それぞれの医者が Middlemarch における長年の医療活動の間に自分なりの治療法を編み出して、それに対して絶対的な権威と誇りと自信とを抱いていた。そしてそれを少しでも揺がそうとするものがあつたとしたら決して許さなかったのである。しかし医業は他の職業とは異なり、実際のところ新しい見解や新しい知識の影響を極めて受けやすい職業である。実際 Lydgate が恐しく病みを伴う少女の腫れ物を完治させたり、また他の医師の誤診により一時は危篤に陥った Fred のチフスを治したりしたことによって Lydgate が薬を出さないということへの偏見がわずかずつなくなっていくと同時に、少女の腫れ物にかかわった Dr Minchin や Fred のチフス



を誤診した Wrench 医師などはもとより他の医師たちもまた、それまでユートピアであった閉鎖的な地方都市 Middlemarch が Lydgate によって波風が立ち始めたのを感じたのは当然であろう。つまり Lydgate の医者としての手腕は次第に町の人々に認められ始めたのであったが、とは言え、Middlemarch の因襲はなお強くそれによって患者数が急激にふえた訳でもなくただ単に在来の医者たちの反感をあおることになっただけであった。さらに Lydgate は Bulstrode 氏の病院において重要な立場に立ち研究のためには最高の条件を得て大きな自己満足は感じたけれども、Lydgate にとってそれはもともと無給の仕事であり、他の医者たちや町の Bulstrode 反対派の嫌悪感をあおりなおさら自分を逆境に立たせることになったのであって、Rosamond とのはでな生活を支える経済的な力を Lydgate に付与する要因は何一つとしてなかったのである。もはや Lydgate と Rosamond の生活の上での経済的破綻は誰の目にも明らかかなことであった。

Rosamond は家計のひっばくはさらさらかえりみることなくあくまでそれまでの生活のスタイルを変えようとはせず、遊興的生活を続けていたが、彼女には彼女なりの道理があったのである。Rosamond は、Lydgate が自分と結婚したからには自分をそのような窮地に追い込まない方策を考えるべきであると思ったのだ。その方法として Rosamond は、まず Lydgate の医療方法において医薬分業などという方策はとらないで、町の他の医者と同じようにふんだんに薬を出し、少しでもよけいにお金をもうけようとする努力を Lydgate がすべきであるということ、それからもう一つおじの baronet の息子や娘たちとの交流を通じて baronet と親しい関係を作り、そして彼のところからお金を融通してもらおう努力を Lydgate がすべきであると思ったのである。しかし医薬分業ということで医者という職業の純化をはかることは、Lydgate の改革精神の根本を成すものであり、そして Middlemarch での彼の存在意義は、すべてそこにあったのであって、Lydgate にとって世俗的な富にこびる生活は全く考えられないことであった。そして baronet や彼の息子や娘たち、つまり彼のいとこたちとは自分が「共通の目的を持たないことを誇らしく思い、彼らの意向や彼の資力を推し測ったり私利私欲にかまけてそれを乞い求めたりしないことをはるか昔に彼は決意していた」のである。またたとえ屈辱にたえて彼らに援助を請うたとしても、彼らがそういう頼りがいのある人たちではないことを Lydgate は知っていた。

家計はたちまち火の車となり、結婚に際して彼が調達しまだ未払いのままになっている第一級の家具や調度類、それから Lydgate が Rosamond に送って今は Rosamond を優雅に飾っている「目の玉がとびでるような高価な」宝石類が差し押さえられる事態にまで発展した。虚栄心と自尊心が人一倍高い Rosamond は、諸悪の原因が夫 Lydgate にあると固く信じて疑わない。こうなると初めて Lydgate は、Rosamond が、科学者として医者として Lydgate が何よりも優先させたいあの特別の願望や目的を全く無視する、自分の共同生活者としていかに不適な女性であったかを知るのである。Lydgate が以前 Rosamond の中に見ていた理想の妻が持つやさしい献身 (tender devoteness) と従順な敬愛 (docile adoration) はとうてい望めるものではなかったのだ。Lydgate は Rosamond が自由気ままに暮らしてきて、結婚への「夢といえ

ばより自分の好みにぴったりの勝手気ままな生活をする事」以外にはなかったことに気がついた。そういう Rosamond に向かって、家計を切りつめるようにとか、生活を建てなおすように努力しようなどということは、全く無だなことであり、かえって彼女の Lydgate への憎悪を増すだけだったのである。夢も希望も消えた Rosamond には現実にはもはや地獄であり、それは夫の、自分への残忍な仕打ちに思われた。

それに Rosamond は、時がたつにつれて、Lydgate との結婚生活そのものにあきあきし始めたのである。

ここ何か月もの間 Rosamond は、夫と失望感が一体となって感じられ始めていた。結婚というこの極めてぬきさしならない関係は楽しい夢をかきたてる魅力をすでに失なっていた。それは彼女の父親の家の不愉快な物事から彼女を解放してはくれたが、彼女の願望や希望を何一つ与えてくれるものではなかったのだ。彼女が恋に陥っていた頃の Lydgate は、彼女にとっては浮き浮きさせる条件を一身に集めていた人であったのに、その大部分が、消え失せてしまい、日常の細々したことがそれと入れかわり、彼女はゆっくりとした時の流れの中でそれらを実践していかななくてはならないのだ。好きなことばかりをすばやく選んでその中をただよい流れていく訳にはいかないのだ。Lydgate の職業上の習慣、つまり彼女には吸血鬼のような病的な趣向のように感じられる、家に帰ってからも科学的な問題に没頭する傾向、愛を求めている頃の会話には決して見られなかった彼の奇妙な物の見方—このすべてが絶えず彼への愛情をそぐ誘因となったのであって、町での彼の立場が非常に不利なものであるという事実がなかったとしても、そしてまた Dover に借金があるという最も驚くべき事実がなかったとしても、彼の存在は、彼女にとって退くつなものであったであろう。

そして Rosamond は、夫との結婚生活に退屈したからと言って劇中の事故に見せかけて同じ劇団に所属していた夫を殺害した、かつての Lydgate の恋の相手、Madam Laure と同様の思いを Lydgate に抱いていたのである。つまり Lydgate の Madam Laure との恋は、Lydgate 自身の結婚生活を暗示する伏線であったのだ。

Lydgate もまた Rosamond に失望し、生活の楽しみは一切消えてしまったものの、彼にはまだ「科学があった—精力を傾けるすばらしい目標があった。まだ一奮発しなければならないのだ—他の満足がすっかり消えようとしているのであれば全力をあげてさらに努力しなくてはならない」と Lydgate は思う。さらに Lydgate は医者であることに対して次のような喜びを心に抱いていたのである。

我々の多くの者は人生をふり返ったとき、今まで接したことのある人々の中で一番親切だった人は医者であったとか、またはあの医者は深い学識から得られた専門的な鋭い感覚によって成されるすばらしい医術を、奇蹟を行なう人のそれよりもなおさら崇高な恩恵として、我々がそれをもっとも必要としている時に施してくれたのだと言うであろう。

このような医者であることの喜びと自負がこの苦難の時に彼を支える一助となつたのであった。自分の世俗的願望を満たしてくれる者にのみ差しのべられていた Rosamond の愛情が、自分に注がれることはもはや皆無であろうと Lydgate は暗たんたる思いで目の前の Rosamond との生活を見すえていたがしかし、このような苦難においてもこうした喜びや自負

や、まだまだ消えてはいない理想が Lydgate の心には息づいていたのだ。しかしそれに比べて、ただ苦しみや悲しみに沈むだけの Rosamond の打ちひしがれた姿が Lydgate の、かつて Madam Laure との恋において示された騎士道精神を刺激し、それが50年の生涯の最後まで Lydgate を Rosamond にかしずかせたのである。とはいえ、家具調度が次々に差し押さえられ、邸宅までも開け放すことを余儀なくされた当面のこの家計の危機を騎士道精神だけで切り切ることはできない。夫 Lydgate がすることのごとく批判的であり否定的である Rosamond と夫婦の契りを続け、彼女の自分へのこれ以上の憎悪をつのらせ、自分が目ざしていた高い理想を放棄せざるをえなくなることを何とか回避するためには、とりあえず膨大な借金を返済し、取りたての圧力から自分たち夫婦を解き放つことが当面の Lydgate の最大の課題であった。

借金返済と自分たちの生計の建て直しのために、何としてでも千ポンドは作らねばならないのだ。おじの baronet たちへのそれまでの対し方や自分の医者としての方針を変えないままに、それだけの大金を作らねばならないという恐迫観念は彼に新たな苦悩を生み出した。自分が科学者として本来しなければならない、また、考えなければならない事柄からはるかにかけ離れた世俗的欲望に常につき動かされ、自分を著しく卑しめているという苦悩である。それは Lydgate の精神を疲弊させる何より大きな動力となったのであった。Lydgate は Rosamond が医者である夫の理想の達成のために妻として何がしかの献身の気持を持ち、小さなつまな家で質素な暮らしをすることを嫌わないほどの愛情を示すことができないものかと考えたが、それが全く不可能なことであることがわかった時、Lydgate は、自分の理想を挫折させようとする強力な力が Rosamond にあることを身にしみて知ったのである。

万策尽き果てて、Lydgate は、以前も今も the half-barbarous, half-idiotic triumph としてもっとも軽蔑している賭博に集中し始めたのであった。George Eliot が「哲学者でも一たん賭博のわなに落ちたなら、同じ状況にある Philistine とほとんど区別はつかない。ただ主な相違はその後の反省である」と言っているように、賭博によってさらに負債が拡大されんとしたちよほどその時たまたま町の遊戯場 Green Dragon の玉つき場にやってきた Rosamond の兄 Fred と Farebrother 牧師の2人の説得と、それから自分の理性の力によって Lydgate はやっと賭博場からは姿を消すことができたのであった。しかし Lydgate にとって賭博は、Bulstrode に金策の依頼をするという家計を救う最後の手段を回避できるかどうかの試みでもあったのだ。

これまで Lydgate は Bulstrode の信頼を得て、自分もまた Bulstrode の病院運営に全面的に協力してきたのであったが、その実、病院勤務はあくまで無給であり、Bulstrode からは何の金銭的援助を受けてはいなかった。その見返りとして自分の「医療上の理想や公共の福利を実行することができた」からである。つまり Lydgate は、

彼らの個人的なつき合いにおいては、彼の (Bulstrode の) 意見は軽蔑すべきものであり、彼の動機はばかばかしいほど矛盾した観念で成り立っているように思われたとしても、自分がこの力のある銀行家を社会の利益のために利用しているのだという意識の下に誇りを持ち続けてきたのであった。自分が Jenner のように科学者として医者として優れた研究成果をあげるのだと

いう高遠な理想は、その手段として Bulstrode の新設の病院が絶対必要であったし、その研究が純粹に彼の科学的な目で行なわれようとするならば、Bulstrode との間には何の拘束もあってはならず、特に金銭関係による拘束は絶対にはなかった。とはいえ、我身にふりかかった不幸の一切を夫の自分への不誠実と裏切りであるとし、Lydgate を夫に選んだことへの後悔に苦しむ Rosamond との崩壊しかけた家庭を再建するための一千ポンドという大金を貸してもらえそうな相手は、Bulstrode を除いて他にはなかった。Lydgate は、新旧病院への全面協力が、無償の、いわば奉仕的活動であったことを思えば、Bulstrode としても自分に恩義を感じるべきだと思った。その上 Bulstrode の妻 Harriet は Rosamond の父 Vincy 氏の妹で、いわば Rosamond は Bulstrode の姪に当たっていたのだ。Lydgate はとうとう自己の信条を越えて、持てる高遠な理想の実現には最悪の条件を自ら形成し、結果としてその挫折の最終の決定的な要因を自ら作り出したのであった。しかし一千ポンドという大金を借りることを願い出た Lydgate に、Rosamond の実家の Vincy 家の浪費癖をよく知っている Bulstrode は、Lydgate と Rosamond の結婚そのものが誤りであったことを指摘したのみで、Lydgate の申し出を拒否したばかりか、Lydgate に一切を破滅させる残酷な破産宣告を勧めたのである。

Bulstrode は Lydgate の依頼を拒否したことが病院運営に対する Lydgate との協力関係を悪化させるであろうことは十分心得ていた。Bulstrode は実のところ病院経営から手をひくことを考えていたのである。Bulstrode は Middlemarch を一時的にもしろ去ることを決意していた。その決意の裏には、Bulstrode の醜悪な過去の現化ともいえるべき Ruffles という男の、Middlemarch への出現という、よもやのできごとがあったのである。当学紀要前号の *Middlemarch* の2章で述べてあるように、たとえそれが独得の世俗的な宗教感覚によるものであったとしても、信心深く人に道を説くことが好きであった Bulstrode にとって、その醜悪な過去があばかれることは、何にも増して恐いことであったことは言うまでもない。Middlemarch における Bulstrode の地位と権限とを確固たるものにしてしているのは、巨萬の富の力による慈善とこの独得の信仰から出た徳義心とであったからである。つまり大都会 London での前半生において不正な手段で得た莫大な金が、Middlemarch における彼の権力の源であり、またその金を公共事業に使うことにより、たとえそれが誰の目にも偽善的行為であると映ったとしても、対外的には一応の評価を得ることもできたし、また神の意志にそって善を成しているという自分自身の心の満足を得ることもできたのだ。そのことと相まって Middlemarch 随一の moralist であると自認する彼の立場は彼の犯した過去の罪が法律的な制制を受けるようなたぐいのものではなく、ただただ一身上の moral に根ざしたものであればなおさら、過去があばかれることは Bulstrode にとっては Middlemarch で生きてきた25年間ばかりか、現在のその町における自分の存在が根底から否定されることを意味したのである。Middlemarch の人々の厳しい moral は町の code となってそこに住まう人々の現在ばかりか過去にも逆のぼってまで監視の目を光らせていたのである。Bulstrode は Ruffles に何度となく大金を渡して Middlemarch から去らせたのであったが、常に Ruffles の陰におびえ、遂に銀行や病院から一たん手を引いて家族ともども Middlemarch を離れる決意をしたのであった。

Bulstrode にとって Lydgate が借金を申し出た一千ポンドの金はそれほど大した額ではなかったが、病院経営を他の人に委ね、それに就する気持も情熱も冷めてしまった今となっては Lydgate との関係が悪化したとしても Bulstrode にとっては何の不都合もなかったのである。

しかし Lydgate から申し出られた借金を拒絶した当日、Ruffles は重症のアルコール中毒症状を起こして、Garth 氏により Bulstrode の別邸である Stone Court に運ばれたのであった。そのようないわくつきの Ruffles の診察を依頼できる医師は Middlemarch の中では Lydgate をおいて他になく、Lydgate に頼むとあればもしかして知られるかもしれない Ruffles と自分との関係を Lydgate の中に留めておいてもらうためにも、Lydgate の借金の申し出を受け入れた方が何かと便利であろうと Bulstrode は考える。それで Ruffles を往診した最初の日、Lydgate は Bulstrode から一千ポンドの小切手を振り出してもらったのである。Bulstrode は Ruffles が Garth 氏以外には自分の過去を話してはいないと思っていたのであったが Ruffles は、度々の Middlemarch への来訪の折にすでに町の人に対して Bulstrode の秘密をあばいていたのである。

## 9

それまで Bulstrode の実像については、彼独特のつじつまのあわない思考様式や偽善、非常に信心家ぶった説教ぐせ等々が Middlemarch の人々に取りざたされ、その裏には後暗い過去があるに違いないという gossip の中での当て推量や、また身近に彼の仕事をするようになった Lydgate の心に映った姿として描写されるぐらいの、きわめてあいまいなものでしかなかったものが、Ruffles の登場によって一挙に赤裸々な姿を呈していったのである。

Bulstrode 自身、自分の過去が罪深くなかったなどとは決して思ってはいない。しかし彼にとって過去の罪は、

教義上の問題であり、心の中でざんげすればそれでいいように思われた。屈辱は誰の目にもとまらないところでのぶのものであり、また彼の行動の意味するものは、神の御意志と精神的なつながりと概念だけに調整された個人的な見解の問題にみえた<sup>33</sup>のである。ところが Ruffles の出現によって Bulstrode は、「このようなひどい懲罰を受けようなどとは思ひもかけなかった具体的な過去」が「いかんともしがたい堅固さをもって」彼の前に現われたと感じた。Ruffles が Bulstrode に与えた苦悩は次のようなものであった。<sup>33</sup>

その苦悩はそれまでの苦悩、つまり誰にも知られることのない自分の内だけのもので、苦悩はしても結局は自分が犯した、人に知られざるその悪事は許され、彼の神への奉仕が受け入れられたという意識をはっきりと感じることができたものとは全く異なるものであった。これらの悪事は、それを犯した当時でさえ、神の計画の促進のために、自分自身と自分の持てるものすべてを神に捧げることを一途に願うことで半ばは清められていたのではなかったのであろうか。…近隣の人たちの前で、そして自分の妻の前で恥をかくのではないかという予感がはっきりと心の奥で感じられた。というのは恥辱の苦痛は、世間の人々がそれをどう評価するかということばかりではなく、かつて自分がどれだけたくさんのことを公言してきたかということによって決まるのである。重罪をのがれることだけを願っている者に

としては、被告席に立たない限り恥辱を感じはしない。でも Bulstrode 氏は、れっきとしたキリスト教徒になることをめざしてきたのである<sup>33</sup>

つまり Ruffles が Bulstrode にもたらした苦悩の根幹は何と云っても Middlemarch における名誉の完全な失墜と恥辱であり、特に、自分とは全く異なって、現在も過去も清廉潔白であり、熱心な国教徒で思いやりと愛情に満ちた妻の Harriet にこの恥辱の過去が知られることであった。「妻からの絶対的な尊敬を得られないということは、彼にとっては死の始まりにも等しいことであった」<sup>34</sup>のである。George Eliot は過去に犯した罪の与える影響について次のように述べている。

彼は過去の生活にあったある事実が明るみにされ、自分が軽蔑の対象になり、熱心に支持してきた宗教に面目がたたなくなって、近隣の人々からてきびしい批判を受けると共に、悲しみに満ちた妻の心を知る危険にさらされていた。…しかし強烈な記憶は、その咎められるべき過去を容認せよと迫る。記憶が再び開いた傷口のように傷み出すとき、その者の過去は、ただ単に死滅した歴史でもなければ現在を準備した用済みの廃材でもない。過去の過ちは現在の生活の中でざんげしてもふり落されるものではない。それはなお犯した者の心の中でおののき震えている一部であって、恥辱相応のおおのきと苦汁とわずきをもたらすものである。<sup>34</sup>

London に居住していた頃の Bulstrode 氏は、Middlemarch では軽蔑の対象となる非国教徒(Dessenter)の Calvin 派<sup>35</sup>の熱心な信徒であった。そして London の商業中心地と西部の高級住宅地で、泥棒まがいの行為で集められた質草を商う大きな質屋 Dunkirk 氏の直統の部下になり、Dunkirk 氏なきあと、自分よりかなり年上の Dunkirk 氏の未亡人と結婚してその膨大な財産を手に入れたのである。Dunkirk 夫婦にはその財産を受け継ぐべき娘がいたが親の商売の秘密を知ってそれに反発し、家を出てしまっていた。Dunkirk 氏の未亡人は、夫の死に際して娘への財産分与を思いたち、娘を探し出すことに八方手を尽くしたのであったが遂に娘は見当たらず財産を保留することもなかった。それで事実上、Dunkirk 氏の財産のすべてが Bulstrode 氏に受けつがれることになったのである。

しかしその時 Bulstrode 氏は、彼の商売にはうってつけの卑劣な部下 Ruffles 氏と共に、Dunkirk 氏のその娘の居所をつきとめていた。Dunkirk 氏の遺産の多くがその娘に流れることを恐れた Bulstrode は Ruffles に金を与えてその地から立ち去らせたのであった。それから30年ほどを経た今、考え方においてもまた日々の行動についても、現在も過去も一貫して神の御前に恥じるものではないことを最高の美德と考える Middlemarch の一市民として、Bulstrode はひとりよがりのものではあるが彼独得の思考様式にのっとってその過去の罪の償いにいそしむ熱心なキリスト教信者となり、moralist となり、慈善家となり、さらにまた実力を持った banker となっていたのである。そのような Bulstrode にとって、Ruffles によってやがてこの罪の全貌が明らかになるであろうという予測は、あまりに苛酷な神の罰に思われた。

彼の魂には、「自分がすることはすべて神ゆえのものであり、己自身のためを思ってすることは全くないのだという信念がますます深くしみ込んでいた」<sup>36</sup>のである。Bulstrode の自己流

の解釈からしたら義理の娘に彼女の父 Dunkirk 氏の財産を与えずに自分が一人じめにしたことはその時から現在までの自分の生き方を見れば確実に正しい行いであったのであり、そのように自分は常に神への信義に基づいて生きているのだという信念は今も変わってはいなかった。

その時までの Bulstrode の人生行路は、彼が思うには、彼が神の代理人となって、あの莫大な財産を最大限有効に活用し、悪用からそれを守るべく輝かしい神の御心によって容認されていたのであった。<sup>88</sup> 実のところその義理の娘は氏素姓の知れない男性と結婚して、彼らに財産のかなりの額を譲ったとしたら、もともと「安逸な生活に身を任せているのであるから、つまらないことにたちまちそれを使い果たしてしまうであろう」と勝手に解釈したのである。つまり Bulstrode は、

欲望が論理上の信念よりも強く、欲望が満足されると、これらの信念にみ合うまことしやかな解釈を与えてきた<sup>89</sup>のであった。彼のこのような考え方からすれば、彼の携わっていたいかわしい泥棒や罪人まがいの商売のような、

この世俗の王なる者の力が最も活発な策略を現わすうまい儲け仕事でも、その利益が神の僕の手で正しい用途に用いられるならば、完全に浄化される<sup>89</sup>のであった。つまり Bulstrode の Middlemarch における慈善事業は、もともと質屋といういかわしい商売を通じて蓄積されたりす汚れた金であるばかりか、他の人に渡るべきであったものを横領することによって得られたさらに汚されたお金によって、その汚れの浄化のために行なわれたものであったのである。

## 注

- (1) baronet : 准男爵 イギリス貴族五等爵 (つまり公爵・duke, 侯爵・marquis, 伯爵・earl 又は count, 子爵 : viscount, 男爵・baron) の最下位 baron のその下の階級。したがって貴族ではないがその下には騎士・knight, 郷土・esquire, 大土地所有者・gentleman があって、人々の尊敬の的である gentry (紳士) 階級の中堅を成す。1688年のイギリス (Middlemarch 中の舞台の140年ほど前) の社会構成ではイギリス全土の総世帯数136万586世帯に対して五等爵が186世帯で、その下の baronet は800世帯である。その数値からしても、baronet が貴族の最下位 baron の更に下の階級であったとしても、高い身分であることは察せられよう。(『世紀末までの大英帝国・法政大学出版局1987年 長島伸一著)
- (2) Middlemarch chap. 36
- (3) 上田女子短期大学紀要第22号 (1999年3月31日刊) 『Middlemarch, Lydgate の人生における理想の挫折について』の注 (44) 参照
- (4) 上田女子短期大学紀要第18号 (1995年3月刊), 第19号 (1996年3月刊), 第20号 (1997年3月刊) 『Middlemarch Dorothea の Mr.Casaubon との結婚における過ちについて』
- (5) 1997年3月発刊

- (6) *Hamlet, Othello, King Lear, Macbeth*
- (7) *Othello*: 1604年頃初演 Moor人の将軍 Othello は、部下である Iago の計略にかかり、妻の Desdemona の貞節を疑い殺すが、後に真相を知り自らも死ぬ。
- (8) MDM, Chap. 12
- (9) *Othello*, 第5幕第2場
- (10) *Middlemarch* の舞台と同年代(1830年前後)のイギリスの工業都市 Treby Magna における労働者の暴動を扱った George Eliot の *Felix Holt, The Radical* の中でも顕著に見られるように、労働者階級の新勢力の台頭の陰に没落していく地主などの旧勢力といった社会変動の影響がこの地においてもぼつぼつ見られるようになり、「社交の境界も少しずつ変わり始めている」商業都市 Middlemarch であれば、古き良き時代を知り、それを懐しむ中産階級の多い Middlemarch の市民がそういった階級や血筋になおさら敏感にならざるをえなかったのは自然であろう。
- (11) 上田女子短期大学紀要22号 1999年3月31日発刊
- (12) MDM, Chap. 11 Middlemarch の社会の変動の様子についての引用は、上田女子短期大学紀要22号当論文1章参照
- (13) George Eliot による最初の本格的小説(1859年)
- (14) George Eliot の描く小説の世界には、美しい女性が数多く登場するが、*Adam Bede* の中の Hetty Sorrel の完璧な美しさについては言葉の限りを尽くしてもまだ足りないほどのものであると作者自身が言明し、後の小説の中の美しい女性である Esther や Dorothea や Rosamond 等々の追随を許さない。George Eliot の小説の中では美貌の女性は幸福になりえないという例の最初の女性となった。
- (15) 1866年発行
- (16) 1861年発行
- (17) George Eliot は社会の進歩を認めてはいるものの整然とした階級制度を持ちそして世の中に秩序を与えていた古い体制のイギリスを愛惜するあまり、*Middlemarch* の中で Dorothea が Will と結婚することにより上流階級を離れ、*Felix Holt* の中で Esther は Harold との結婚を断った時点で広大な領地を有する Transome Court を放棄し、そして *Silas Marner* の中でも Eppie が実の父で地主である Godfrey の屋敷で暮らすことを拒否することにより子供のいないその地主一家の没落は必須であるという、そういった古き良き時代を作っていた gentry 階級の没落、消滅への感傷が、彼女たちの人生の選択に対して「本当にそれでいいのか」といった思いがそこかしこにただよっているのである。
- (18) We may handle even extreme opinions with impunity while our furniture, our dinner-giving, and preference for armorial bearings in our own case, link us indissolubly with the established order. (MDM, Chap. 36)
- (19) MDM, Chap. 45
- (20) 上田女子短期大学紀要22号の当論文1章の中の Dorothea の婚約披露パーティーの席上に



おける町の人々の医療上の討論において baronet の Chettam 老夫人や地主 Brooke氏の発言からも察せられるように、19世紀当初のイギリス社会の激動期にあっては進歩的革新的考え方は往々にして gentry 階級の中に育ったのは興味深い点である。

- (21) MDM, Chap. 45 Bulstrode が企画した新設病院とその管理について Middlemarch の反対党は確かに人の意見のくりかえし (echo) が多かった。
- (22) MDM, Chap. 45
- (23) MDM, Chap. 44
- (24) MDM, Chap. 44
- (25) MDM, Chap. 64
- (26) MDM, Chap. 58
- (27) MDM, Chap. 64
- (28) MDM, Chap. 58
- (29) MDM, Chap. 66
- (30) 上田女子短期大学紀要22号 当論文 注(19)参照
- (31) Philistine: 俗物・凡俗の人。教養や美的洗練を欠いたり、それらに無関心で、平凡な考えや趣好に満足している者として軽蔑される人についていう。
- (32) MDM, Chap. 67
- (33) MDM, Chap. 53
- (34) MDM, Chap. 61
- (35) John Calvin (1509—64 フランス生まれでスイスにおける宗教改革者) 一派の教義。神意による人間の運命の予定, 神の絶対主権, 聖書に最高の権威を置くことおよび恩寵の不可抗力性を強調する。
- (36) MDM, Chap. 61

#### 参考文献

- (1) 「世紀末までの大英帝国」長島伸一著 法政大学出版局 1987年
- (2) Shogakukan Random House English Japanese Dictionary
- (3) *Adam Bede* by George Eliot, Collins London and Glasgow 1963
- (4) *Silas Marner* by George Eliot, The Penguin English Library
- (5) *Felix Holt, the Radical* by George Eliot, Everyman's Library 353
- (6) *The Real Life of Mary Ann Evans* by Rosemarie Bodenheimer, Cornell University Press 1994
- (7) *George Eliot and the Politics of National Inheritance* by Bernard Semmel, Oxford University Press, 1994
- (8) *Othello* by Shakespear, The Arden Shakespear, Methuen & Co. LTD, London